

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

－日本古代史研究ノートあるいは覚書その2－〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕	252

長浜市域における弥生時代の石器

～今川東遺跡出土石器を中心に～

稲葉隆宣

1. はじめに

湖北平野の南西部に位置する長浜市は、東に横山丘陵、西に琵琶湖をのぞむ姉川以南の平野部を占地としている。弥生時代前期の環濠を有する川崎遺跡に代表されるように、長浜市域は滋賀県下でも最も早く弥生文化を受容した地域での1つであった。湖北平野が姉川・高時川をはじめとする諸河川の沖積作用によって形成された扇状地性の沖積平野であり、その扇端に低湿地が形成されたという環境が、稲作農業を経済基盤とする弥生文化の受容にとっては必要不可欠な条件であったと考えられる。そうした低湿地を真近に控えた微高地に各弥生遺跡が点在しており、多くの場合現集落と重複しているため、遺跡分布調査などで認知されていても、具体的に遺構の検出されている遺跡が案外少ないのは先学の指摘されているとおりであろう。

近年、弥生時代の石器の出土例は、開発に伴う遺跡調査数とともに徐々に増加してきている。幸運なことに、筆者も今川東遺跡の調査の機会を得、砥石類を中心とした弥生石器の出土をみたため、長浜市域における弥生石器出土遺跡と比較することにより、今川東遺跡の性格を検討してみたい。

2. 今川東遺跡出土石器

今川東遺跡は文字どおり今川町の東側に位置する遺跡で、近年、ほ場整備や灌漑排水などの事業に伴って調査が行われている。現在までのところ竪穴住居は1棟しか検出されていないが、落ち込みや溝などから弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭にかけての大量の弥生土器・土師器が出土しており、付近にかなり大規模な集落の存在が予想される。弥生土器の中には、紀伊や東海系のものも存在し、かなり広範な地域との交流の一端が窺える。筆者の行った調査においてもそれを裏付けるような遺物が出土している。以下、調査で出土した石器について若干説明を加えてみたい。

調査にあたって3つのトレンチを設定したが、弥生時代の遺構・遺物を検出したのは1トレンチのみである。SD01は断面V字状を呈しており、人工的に掘削された溝とおもわれる。SD02は断面U字状を呈するが、底に幅20cmほどの浅い掘り込みがあり、人工的掘削による溝である可能性がある。石器は、トレンチ北端の沼跡（以下、北端沼跡）・SD01・SD02・SD07の4つの遺構から出土している。取り上げた石は100点を数え、そのうち30点は自然石と判別されたが、チャートなど石器の材料となりうるものも含まれている。残り70点は何らかの形で人の手の加わったものであるが、フレークを除いた、所謂、石器として認定できそうなものは40点であり、石鏃・磨製石斧・環状石斧・砥石などが出土している。

石鏃は2点出土しており、ともに北端沼跡からの出土である。1は先端部を少し欠損している



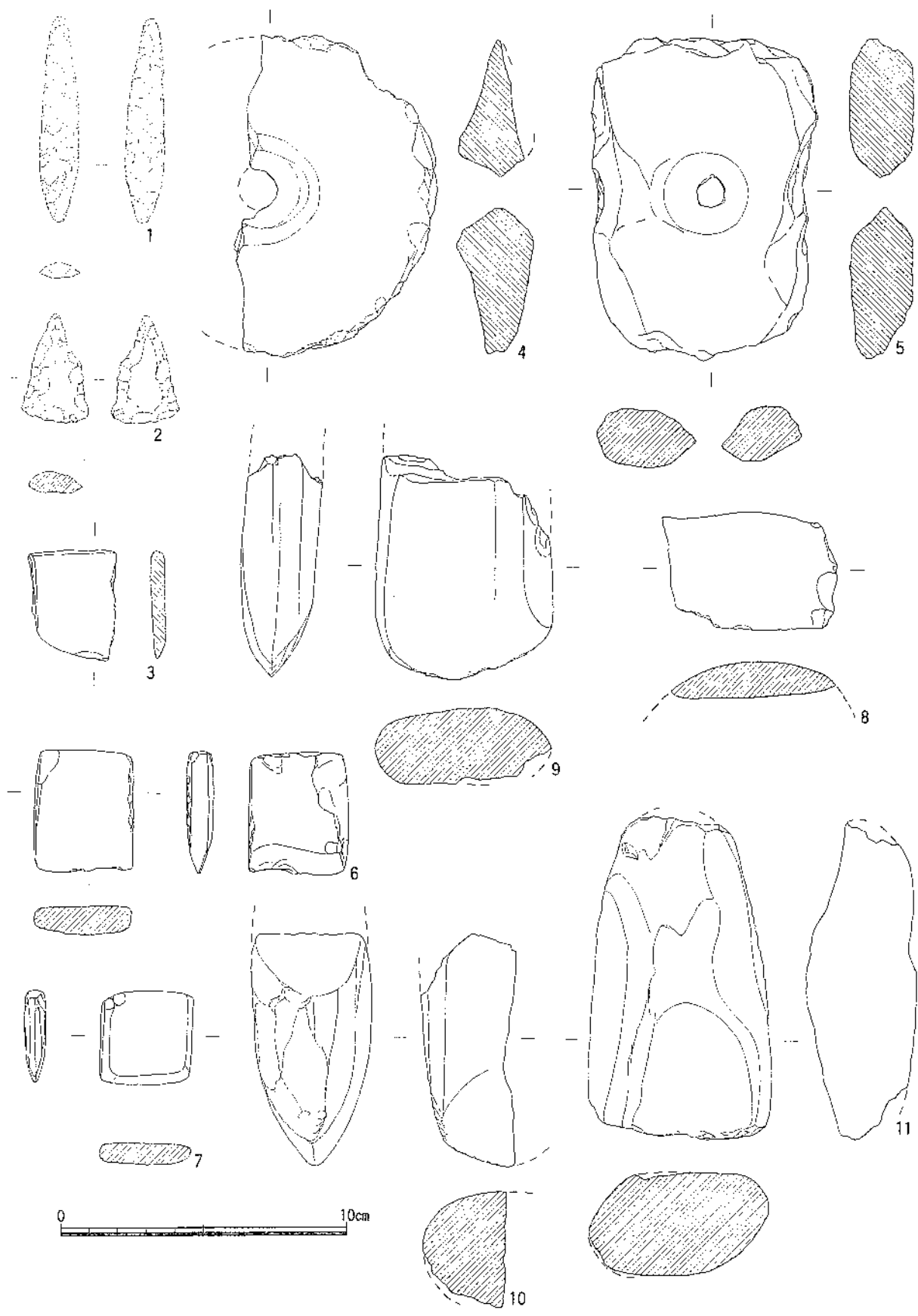
- 1 十里町遺跡
- 2 口分田北遺跡
- 3 川崎遺跡
- 4 長浜北高遺跡
- 5 越前塚遺跡
- 6 北郷里小遺跡
- 7 中町田遺跡
- 8 今川東遺跡
- 9 正言寺遺跡
- 10 大東遺跡
- 11 永久寺遺跡
- 12 大辰巳遺跡
- 13 宮司遺跡
- 14 高田遺跡
- 15 塚町遺跡
- 16 鴨田遺跡
- 17 大戌亥遺跡
- 18 高橋遺跡
- 19 高橋南遺跡

第1図 長浜市主要弥生遺跡分布図 (1 : 50,000)

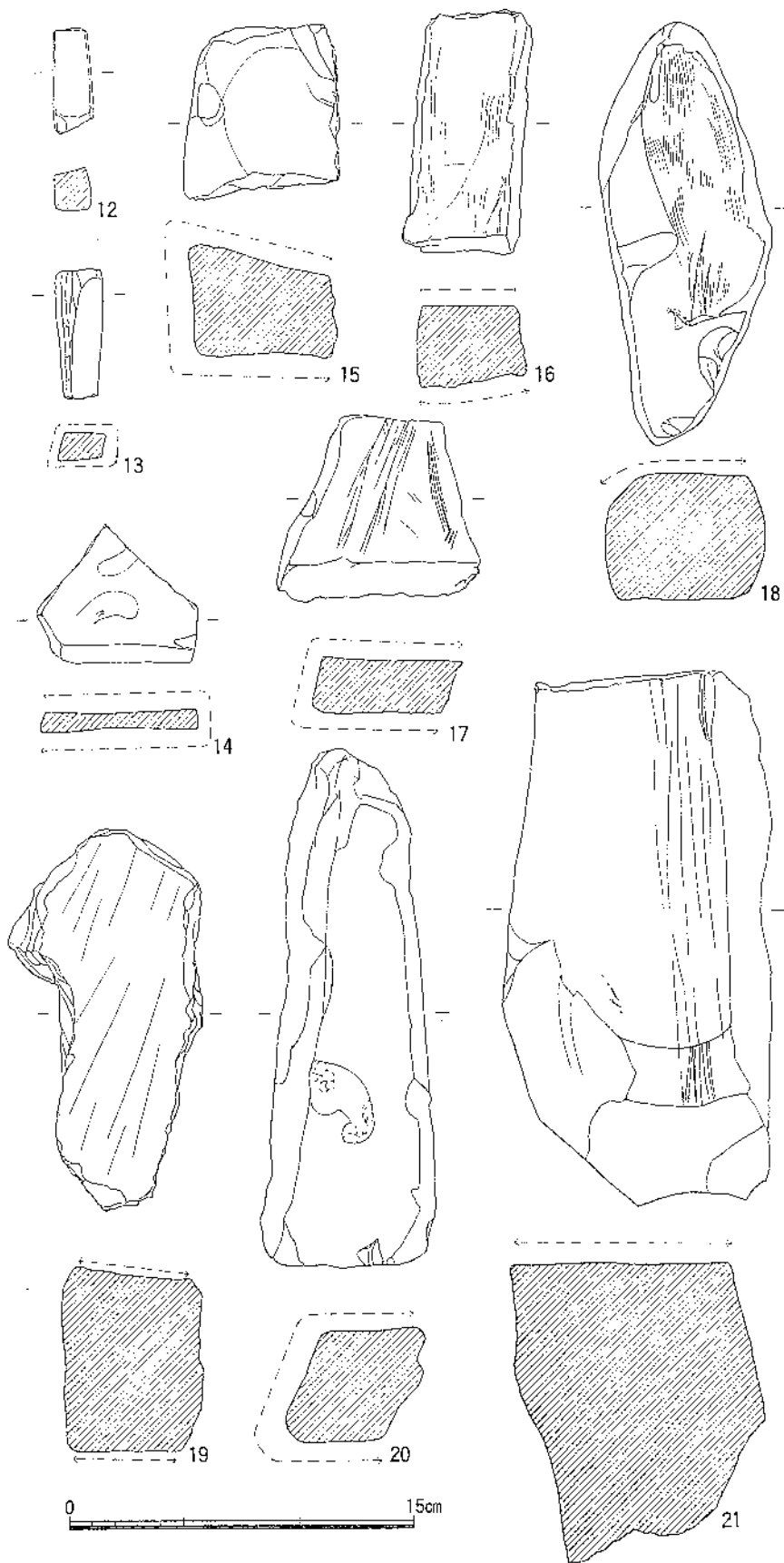
ようだが、東海地方⁽²⁾に若干の類例が見られる。2は粗いチャートで、つくりも粗雑であり、中ほどに礫表を残す。3は石包丁の一部とおもわれる破片で、SD02から出土しており、片刃の刃部を作り出している。4は環状石斧で、両面から穿孔されており、両面ともきれいに磨かれている。5も4と同様両面から穿孔されているが、長方形に近い形態を有し両面とも磨かれた形跡はない。他地方に類例が存在するかもしれないが、少なくとも滋賀県内には類例はなさそうである。ともにSD07からの出土である。

6～11は磨製石斧で、すべてSD07からの出土である。6・7は、ほぼ完成の扁平石斧できれいに磨きあげられており、6は意識して片刃の刃部を作り出しているようだが、7は片刃であるのか両刃であるのか判然としない。8～11は太型蛤刃石斧で、欠損は激しいものの8～10は丁寧に磨かれており、9・10はきれいな両刃を形成している。

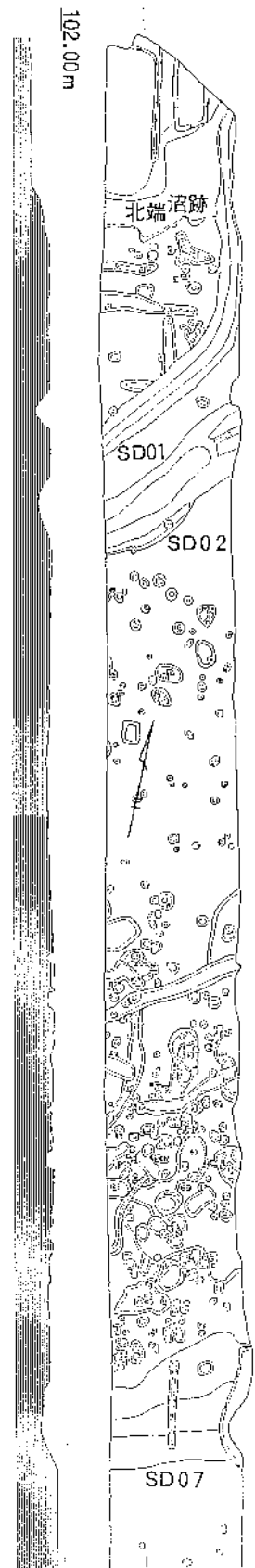
砥石は先に述べたすべての遺構で出土しており、計26点を数える。欠損しているものが多く、数面がきれいに使用されているものから1面のみの使用で数度しか砥がれていないようなものまで様々なバラエティーがあるが、大きく3つに分類できるようである。⁽³⁾1つめは大型の砥石で、砥石を設置し、磨こうとする対象物を動かして砥ぐものである。形態は不定形だが、概して細長いものが多く、長辺に平行する方向に使用されている。18～21がそれにあたるが、20は表面に著しい砥痕を残さない。それに対して18・19・21は表面に粗い砥痕を残す。2つめは小型のもので、手持ちの砥石である。12・13がそれにあたり、ともに粘板岩とおもわれる材質で四周すべて使用



第2圖 今川東遺跡出土石器実測図(1)



第3図 今川東遺跡出土石器実測図(2)



第4図 今川東遺跡T1実測図
(S=1/300)

されており砥痕を残さない。26点中、明らかに手持ちの砥石であると認定できるものは、この2点のみであった。もう1つは中型のもので、手持ちであったか否かの判定が困難なものである。14～17がそれだが、形態は不定形で砥痕を残すものと残さないものがある。以上のような今川東遺跡出土砥石の例から推測すると、石器製作の際には石材を粗割・打裂・敲打した後、主に大型・中型の砥石を使用して最後の成形のための粗砥をほどこし、続いて中型・小型の砥石を用いて仕上げを行っているようである。このほかの3点は、リタッチドフレークが1点とフレークに二次的加工痕の認められるものが2点で、北端沼跡とSD01から出土している。

3. 長浜市域の弥生石器出土遺跡

川崎遺跡・宮司遺跡・塚町遺跡・十里町遺跡・正言寺遺跡・鴨田遺跡・高橋南遺跡などで弥生石器の出土例がある。

川崎遺跡⁽⁴⁾は前期中段階から新段階にかけての環濠を有する拠点集落であると考えられ、今のところ中期には存続しないことが確認されている。石器は環濠から石包丁と蛤刃石斧が出土しており、そのほかにも打製石鏃・石錐・乳棒状石器・砥石などが出土している。磨製石斧の出土例数に対して砥石の数は少ないようである。宮司遺跡⁽⁵⁾では、前期中段階ないし新段階の土器が出土した溝から扁平片刃石斧などが出土している。塚町遺跡⁽⁶⁾は縄文時代晩期から庄内期の遺物が出土しているが、特に前期後半から中期後半を中心として集落が営まれており、2重にめぐる環濠・方形周溝墓などから計130点にもおよぶ石器が出土している。種類も豊富で蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁・磨製石剣・打製石剣などが出土しているが、注目すべきは玉造関係遺物で緑碧岩・流紋岩製の管玉5点と玉砥石・石錐が出土している。また130点中、砥石は45点を占めている。十里町遺跡⁽⁷⁾では中期の特徴をもつ打製の石剣が出土しているが、残念ながら遺構は検出されていない。正言寺遺跡⁽⁸⁾は縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土するが、最も主体となる時期は中期で、出土した石器も中期のものと考えられている。石包丁・蛤刃石斧・砥石などのほかに碧玉の原石が出土しており、玉造との関係が推測される。鴨田遺跡⁽⁹⁾は中期後半から大規模な集落を形成するが、磨製石鏃・環状石斧・磨製石剣・磨製石鏃・打製石鏃扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石戈・打製石剣などが出土しており、実に豊富な石器組成をもつ。特筆すべきは2000点以上にもおよぶ砥石の出土例で磨製石器製作集団の存在が推定されている。この砥石の中には玉砥石が数点含まれており、ほかに玉造関係遺物としては碧玉の原石・未製品・剥片・石鋸素材が出土しているようである。高橋南遺跡⁽¹⁰⁾でも玉の原材料である碧玉や玉砥石が出土しているが、それ以外の石器も蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・磨製石鏃などのバラエティーがある。

以上、長浜市域の弥生石器出土例を概観してきた。滋賀県教育委員会の『平成2年度滋賀県遺跡地図』によればこのほかにも若干の出土例があるようだが詳細な報告を持たない。

4. まとめにかえて

長浜市域の弥生石器出土遺跡でその遺跡の性格が明確なのは、玉造関係遺物が出土した鴨田遺跡・塚町遺跡・高橋南遺跡の3つである。特に鴨田遺跡では2000点以上にもおよぶ膨大な砥石の数から、玉造集団としての機能とともに、磨製石器研磨の専門集団としての機能も備えていたで

あろうことが推定されている。¹¹⁾鴨田遺跡よりも出土例は少ないものの、塚町遺跡についても同様の機能が推定できそうである。今のところ今川東遺跡では、玉造関係の遺物は出土していないため、先に述べた遺跡と同様の機能をもつとは考えにくいだが、今後の調査が集落中心部に接近していくにしたがって明らかになっていくことを期待したい。

近畿地方の弥生時代における石器の動向は、縄文時代以来の技術と大陸系磨製石器の導入という背景をバックに中期後半頃にピークを迎え、その後の鉄器の普及に伴って後期になると急速に姿を消す。今川東遺跡が営まれはじめたのは中期後半と思われるが、近畿地方の中期の石器組成は石鏃・石包丁約20%、不定形な削器約15%、石槍状石器約10%、石錐と砥石約8%、太型蛤刃石斧約6%である¹²⁾という。しかし、今川東遺跡においては石器と認定されたもののうち65%が砥石で、また15%が磨製石斧で占められており様相が異なる。推測の域を出るものではないが、磨製石斧専門の石器製作集団が存在し、その製品のもとに他地方との交易が行われていたという可能性を考える必要があるかもしれない。今後の資料増加により石器組成が変動する可能性はあるものの、30点のフレークや紀伊や東海の土器の出土も石器製作集団の存在を裏付けるものとして捉えられると考えている。

調査の機会に恵まれた今川東遺跡の位置を考えてみるために、弥生石器に注目し、若干自分の思うことを述べてみました。不勉強故多くの問題点を含んでいるとは思いますが、これをステップに一步でも前進できればと思います。

註

- (1) 筆者が観察を行い、さらに中村健二氏（滋賀県文化財保護協会）に観察を行っていただき御教示を得た。記して感謝の意をあらわしたい。
- (2) 三重県津市の納所遺跡出土例などが類例としてあげられる。埋蔵文化財研究会・関西世話人会『第31回埋蔵文化財研究集会弥生時代の石器—その始まりと終わり—』第II部第5分冊大阪府以東編 1992年
- (3) 下條信行『石器の生産』『弥生文化の研究』5 道具と技術1 1985年 雄山閣 砥石を粗砥・中砥・細砥の用途と大小の形態から分類されている。
- (4) 『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』 1971年 滋賀県教育委員会
- (5) 宮成良佐ほか『宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書』 1977年 長浜市教育委員会ほか
- (6) 伊藤潔『地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書』（長浜市埋蔵文化財調査資料第11集） 1995年 長浜市教育委員会
- (7) 註(2)文献 第I部第2分冊中・四国、近畿、東海編 1992年
- (8) 註(7)文献に同じ
- (9) 黒坂秀樹「近江における弥生玉作研究ノート」『滋賀考古』第3号 1990年 滋賀考古学研究会
進藤武「近江における弥生石器の消長」『滋賀考古』第7号 1992年 滋賀考古学協会
- (10) 北村圭弘「高橋南遺跡Ⅱ」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XIX-1 1992年 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- (11) 註(9)文献で黒坂氏は、玉作遺跡を小集団専業、集落内専業、移動・自給、小規模自給の4つに分類し、時期区分をおこなっておられる。
- (12) 平井勝『弥生時代の石器』（考古学ライブラリー64） 1991年 ニュー・サイエンス社

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668